明石の史跡（５）大蔵谷宿の役割

大蔵谷宿とは「大蔵谷村を東西に貫く山陽道沿いに発展した近世の宿場町」といわれ（兵庫県の地名Ⅱ）、宿としての機能は、南北朝期には存在が知られる。近世の大蔵谷は、ただ大名を含めた多くの人々に、たんに旅宿を提供したにすぎないのだろうか。

天和２年（１６８２）３月、明石藩第７代藩主本多政利の国替えにより、かわって越前大野より松平直明の明石転封が発令された。

５月２９日の正午に入城の運びとなる。それに先立ち、当日の午前中には、藩内の大庄屋・小庄屋・町人らが、大蔵谷川（現朝霧川と思われる）の東において、新藩主に御目見えして、直明を迎えている。直明は行列を整えて山陽道を西下したものの、わざわざ半里東の山田村の東（山田川の河口部）にて船を召しており、海路より大蔵谷川の河口部左岸に上陸。そこで上述した大庄屋らの出迎えを受けたのである。直明を出迎えた一人でもある三木郡小川組大庄屋安福藤右衛門武重は、大蔵谷川と山田川の距離を「半里」と記録しており、この間約１．５キロほどあるので、当時の「半里」とはこの程度の意識だったようである。

元禄１１年（１６９８）５月８日、江戸より帰着した直明は、８日が精進日ということで、帰城をさし控え、その夜は大蔵谷に一泊。翌九日の明の６ツ半（午前７時）に無事に入城する（累年覚書集要）。

直明以外の藩主の行動は不明とはいえ、明石藩主にとって、大蔵谷宿は、城下の東の出入り口として、特別な意味を持っていたのではなかろうか。

大蔵谷本陣跡

日本歴史学会会員 茨木 一成